

研究集会「ライナー・シュールマンの哲学」を開催して

池田 喬

I

2024年3月と4月に連続して、明治大学心理社会学科哲学専攻内に設置されたMIPs(Meiji Institute of Philosophies)主催のイベントを二つ企画した。一つ目は、3月1日(金)に開催したピエール・アドの哲学についての鼎談イベントであり、二つ目は4月2日(火)に開催したライナー・シュールマンの哲学についての研究集会である。M. フーコー、J. デリダ、E. レヴィナスらによって彩られたいわゆる「フランス現代思想」の影に隠れ、国内ではほとんど論じられることがないが、二〇世紀にフランス語で書いた二人の重要思想家を連続で取り上げたわけである。

私自身はM. ハイデガーを専門とし、近現代ドイツ哲学を光源として哲学の世界を見ている者であり、フランスの現代思想には疎い。その私がこの二つの連続イベントを企画・開催した一つの大きな理由は、この二人の思想家が、デリダやレヴィナスとはまた異なる仕方で、ハイデガーの哲学に思いがけない光を投げかけているからである。すなわち、アドは精神の修練としての生き方としての哲学の現代版としてのハイデガーを、シュールマンは存在論的アナーキーの哲学者としてのハイデガーを提示する。

アドについての鼎談の内容については本号に当日の記録を掲載したので、そちらで確認できる。その記録には掲載されていないが、私はその鼎談の最後に、アドの次の言葉を引用して、研究集会「ライナー・シュールマンの哲学 ― アナーキーの原理を中心に」の告知をした。

二つの世界、つまり内面の密かな経験の世界と日常のありふれた世界とは、結局は並列したものなので、その年齢では問題を感じなかったのです。ものごととはこんなもので、それだけのことでした。ずっと後になって私は、この状態に問題を感じている人物に出会った。それはライナー・シュールマン氏(『アナーキーの原理』の著者)で、ソルシュワールのドミニコ修練士であった七〇年代に少なくとも一年間、高等研究実習院で私の講義の聴講生だった人です。彼はハイデガーの影響を深く受けており、彼のキリスト教信仰は、彼の「本来的」な実存の経験、〈存在〉への開かれと調和せずに対立していました。彼はその悩みを記した個人的な手記を私に見せてくれたのですが、私はどのように彼を助けるべきかわからず思い悩んだものです。(アド、P.『生き方としての哲学 ― J.カルリエ, A.I.デイヴィッドソンとの対決』(小黒和子訳)、法政大学出版局、2021、

p. 21)

アドが会ったシュールマンは、ハイデガーに深い影響を受けており、そのキリスト教信仰と「本来的」な実存の経験が調和せずに深く悩んでいたようだ。この箇所の解釈は難しいが、シュールマンが、ハイデガーの哲学を全身全霊で受け止めた、あまりにも真剣なハイデゲリアンであったことは伺える。

II

しかし、私には日本のハイデガー研究者にシュールマンの真剣さを受け止める用意があるとは思えなかった。日本の専門的なハイデガー研究者には、シュールマンに言及している人を見当たらないというだけではない。「アナーキーの原理」などという — ハイデガー自身にはない — 概念でハイデガーを解釈するなど聞けば、そんな解釈はまともなハイデガー解釈ではないとして、受け付けられないような雰囲気があるからだ。そこで私は、シュールマン哲学に関する研究集会の趣意文を作成するにあたって、誰もがハイデガーの直系の弟子と認める H-G. ガダマーによるシュールマンへの言及と、ハイデガー自身が若きシュールマンを迎え入れたという事実を盛り込んだ。以下がその趣意文である。

シュールマンの本〔『アナーキーの原理－ハイデガーと行為の問題』〕には特別に注目する必要がある。この本は尋常ではない慎重さで書かれており、ボーフレが向けたあの問いに対するハイデガーの拒絶を真剣に受け取る点で、完全にハイデガーに忠実である。ハイデガーが『ヒューマニズム書簡』で答えたあの問いである。その問いとは「いつあなたは倫理学を書くのですか」という問いである。(H-G. ガダマー) [注 1]

ガダマーがこのように格段の重要性を認めている、R. シュールマン (Reiner Schürmann, 1941-1993) の『アナーキーの原理－ハイデガーと行為の問題』(1982 年) は、ハイデガーのアナーキズム的解釈の記念碑的著作であり、今日でも影響力を誇っている。

ドイツに生まれたドミニコ会の神父であり、フランス語で書き、ニューヨークで教えたシュールマンはハイデガーに深刻な影響を受け、ガダマーの言葉で言えば「尋常でない慎重さで」ハイデガーを研究した。M. エックハルトを研究していた 24 歳の時にすでに、ハイデガーに手紙を送り、面会を許され、Es gibt Sein の es について討論してもいる。日本語では、S. クリッチリー & R. シュールマン『ハイデガー『存在と時間』を読む』(串田純一訳、法政大学出版局) でその明晰な解釈を読むことができる。

他方、シュールマンは、ニューヨーク・ニュー・スクール・フォー・リサーチにおける H. アレントと H. ヨナスの同僚であり、G. アガンベンや A. ネグリに注目された政治哲学者である。例えばネグリは、「ライナー・シュールマンを読まなければなりません

ん。[...] 彼は特異な本を一冊書いているのですが、そのなかで、西欧の形而上学の歴史には優生思想が倒錯的なかたちで持続していることを証明しようとしています」と述べている。[注 2]

シュールマンの思想は各方面からこれほどまでに重要視されてきたにもかかわらず、日本ではほとんど知られていない。この研究集会では、その思想をハイデガーとアナーキーの原理を中心に検討する。まず、シュールマンの思想にかねてから注目していた宮崎裕助氏（専修大学）にその思想の全体像を紹介していただく。次に、『アナーキーの原理』を翻訳中の中西淳貴氏（東京大学）に、シュールマンにおけるハイデガーのアナーキズム的解釈について報告していただく。最後に、ユダヤ思想史の観点を踏まえて合田正人氏からレヴィナスとシュールマンの関係についてお話しいただく。最後に全体討議の時間を設け、シュールマンの哲学の魅力や可能性について話し合いたい。

注

[1] H-G. Gadamer, Gibt es auf Erden ein Maß?, *Philosophische Rundschau* Vol. 32, No. 1/2, 1985, S. 18.

[2] ネグリ、A. 「「帝国」とは何か」（杉村昌昭訳）、『現代思想』Vol. 31 (2), 2003, p. 41.

III

当日、研究集会の冒頭で私はこの趣意文を読み上げた後に、ガダマーが挙げている「いつあなたは倫理学を書くのですか」という問いがどういう文脈で登場しているか、テキストに即して確認した。その内容を簡単に再構成しておく。

まず、ハイデガーはこの問いに正面から答えることはせず、むしろ、倫理学と存在論のような学分的区分に従うことを控え、倫理学（エーティック）の語源である古代ギリシャ語の「エートス」は「滞在、住んでいる場所」あるいは「人間がそこに住んでいる開かれた圏域」を指すと論を展開する（Martin Heidegger, Brief über den Humanismus, in *Wegmarken*, Gesamtausgabe Bd. 9, Vittorio Klostermann, 1976, S. 354）。このように述べる時、ハイデガーは、プラトン、アリストテレスにおける「倫理学」の成立以前に遡って、ヘラクレイトスの断片にエートスの用法を求める。そして、ハイデガーは彼が「根源的倫理」と呼ぶものを提示していくのだが、この倫理の体现者として登場する思索者ヘラクレイトスの姿が実に興味深い。

ハイデガーは、アリストテレス『動物部分論』における報告に依拠して、見知らぬ訪問者たちが思索者ヘラクレイトスを訪れた時の出来事を論じている。その時、ヘラクレイトスはパン焼きかまどのところで体を暖めていた。ありふれた質素な場所である。しかもヘラクレイトスはパンを焼いてさえいない。訪問客たちは、平凡な人の暮らしにはない思索者の特別な姿を見物できると期待したが、興味深く噂の種になるようなことがないので立ち去ろうとする。その様子を見て、ヘラクレイトスはこの人たちに勇気を出すように声をかけ、中に入ってくるように促す —（Heidegger, *Wegmarken*, S. 354-356）。

研究集会「ライナー・シュールマンの哲学」を開催して

この逸話は、本特集に収録された中西氏の論考における「放下」の解釈と共鳴し、現代における政治的実践の一つの姿を指し示しているように私には思える。そのように思えたことがこの研究集会での私の最大の収穫であった。だが、その話をまとめるためには、そこでヘラクレイトスが語ったとされる言葉「ここにも神々はいるのである（Götter wesen auch hier an）」に対するハイデガーの解釈に立ち入る必要がある。今度の課題としたい。

IV

以下に当日のプログラムを掲げておく。宮崎氏には当日の発表資料を本特集に掲載することをお許しいただいた。中西氏と合田氏からは当日の発表資料を基にした論考を本特集に寄稿していただいた。

2024年4月2日（火）

14:00-18:00 明治大学和泉キャンパス

場所：リエゾン棟 L1 教室

無料・参加自由

主催：Meiji Institute of Philosophies (MIPs) 明治大学文学部心理社会学科哲学専攻

14:00-14:10 趣旨説明 池田喬（明治大学）

14:10-14:50 講演 1 宮崎裕助氏（専修大学）「ライナー・シュールマンを導入する——その思想の全体像」

14:50-15:10 質疑応答

15:10-15:50 講演 2 中西淳貴氏（東京大学）「蜂起の時節 —— アナキストに読まれるハイデガー」

15:50-16:10 質疑応答

16:10-16:20 休憩

16:20-16:50 講演 3 合田正人（明治大学）「アナルシーからアナルシー —— 襪と水面：レヴィナスとシュールマン」

16:50-17:10 質疑応答

17:15-18:00 全体討議